

分の足で歩き、手に触れてきたのは、ただ美しいだけでなく、激しさの片鱗を伺わせる富士山の一面だった。あの湖には昔、赤熱の溶岩流が水煙をあげてなだれ込んだだろう。今はコウモリでも住みそうな洞穴にも焼き払われた木がいぶっていただろうし、檜や松の生い茂る青木ヶ原樹海も、か

つては荒涼としたむき出しの溶岩流だったのだろう。そんな想像をしながら、家の窓から富士山を眺めるのも、以前にはなかったことであり、ささやかながら収穫といえるのではないかと思っている。

(10月2～3日 浅海教官指導)

赤坂・麻布巡検

鈴木 順子

本校の開学記念日である11月29日の9時、虎ノ門・文部省教育会館集合。私達2年生にとっては3度目の1日巡検である。天候はあいにくの雨であった。傘をさして強風に立ち向かいながら歩くこと十数分ののち、赤坂アークヒルズ内のアーク森ビルに到着、会議室のようなところで説明を受けた。

新しい時代のニーズにこたえるべく誕生したインテリジェントシティ——全環境都市——と称するアークヒルズは、56000㎡の敷地に住居、ホテル、TV局、ホール、広場、事務所などが有機的に配置されている。高度情報化社会に対応した、まさに快適なひとつの“街”である。もともとの赤坂・六本木地区は坂が多く、道路は狭く曲折し、老朽化した住宅が密集していて、防災上の問題があった。そこでこの再開発事業が行われたのである。とはいえ以前の住民でアークヒルズに残っている人はあまりいないそうだ。家賃が月何十万円もしたら、そのまま住み続けることのできる住民の数にも限りがあるだろう。それにしてもここアークヒルズの交通の不便さには問題があるように思える。JR、営団各駅どこからでも徒歩10分以上はかかるというのだから。

さて、説明を聴き終えて屋外に出ると天候はいっそう悪化していたので、寛容な栗原先生はなんと残りの日程を別の日にしてください。そのようなわけでこの日は11時頃に解散となった。

1日巡検の2日目？は12月23日に行われた。晴れた穏やかな日であった。今度は10時にJR町町駅に集合、昔ながらの学生街を通して慶応大学へ向かった。赤レンガの慶大の図書館は明治45年に建築されたゴシック様式の建物で、重要文化財に指定されている。慶大の門を出て、坂をずっと登り、次は三井倶楽部へ。が、中には入れてもらうことができず、麻布方面へ向かい、以前は材木を舟で運んでいたという古川を渡った。大イチョウで有名な善福寺に着くと、福沢諭吉や越路吹雪の墓が私達を驚かせた。この後、賢崇寺で解散、昼食の後、麻布十番の商店街から六本木方面へ。高級住宅地となっている狸穴、ソ連大使館や日本経緯度原点（元東京天文台）などのある麻布台を通り、飯倉片町のスペイン村に足を踏み入れた。建物は古く傷んではいるものの、本当に西洋の雰囲気を感じる一角であった。また坂を登り少し歩いてここで解散となった。

赤坂・麻布・六本木というと、様々な面で最先端をいく街、というイメージが強かったが、実際自分の足で歩いてみると意外に昔の面影が残っているものだった。しかし、それらの地域もいずれば再開発を行うのであろう。

この巡検では再開発のなされたアークヒルズと、昔のままの麻布の家々がとても対照的で、特に印象に残った。

(11月29日・12月23日 栗原教官指導)